

# 充実した不可能

「かつらの合っていない女」をめぐって

阿部公彦



人は美術作品を前にするといろいろ語りたくなる。なぜだろう。原因は、相手の寡黙さかもしれない。黙っている人を前にすると、こちらはついじろじろ観察して、言葉を補いたくなる。あれこれ質問し、勝手に答えまで用意し、その気持を慮り、心配し、やがて反応がないことに苛立ち、文句を言い始める。ちよつとストーリーカーのようだ。

実は古代ギリシャの頃からこうした「じろじろ語り」は蔓延していて、後にエクフラシス（絵画詩）という様式として定着することにもなる。詩と美術作品は古来、しのごしを削るジャンルとして拮抗してきたが、そんな中で「絵を見ながらつい言葉をつむいでしまう」ような詩も意識的に書かれるようになった。たとえば英国ロマン派の詩人ジョ

ウンの共作『かつらの合っていない女』も、まさにそんなジャンルの拮抗の上になりたった作品である。この本は、キーファーによって描かれた十五の肖像画に触発されたブラウンが、それぞれの作品に文章をつける、というプロセスで制作されたのである。

キーファーの作品はいずれも小ぶりの画面ながら、その枠からあふれんばかりの分厚い情念を発散している。濃く、重く、ときにぱつと目を打つ鮮烈さのまじる色合いには、抽象表現派の流れを感じさせる。あるいは、小さい画面に太い線でくつきり切り取られた人物の顔からは、遠くジョルジュ・ルオーの画面も思い浮かぶ。

他方、ブラウンの文章は必ずしも「詩」と呼ぶ必要はないかもしれないが、限りなく詩に近い、そしてまさにエクフラシス的な作品だと言える。おそらくキーファーの作品



ン・キーツの「ギリシャ壺に寄せるオード」は、壺を前にした詩人らしき人物が勝手に騒ぎ立て、ヒステリーを起こし、ついには悟りに至るといふパターンをたどる作品で、エクフラシスのいわば古典。W・H・オードン「美術館」とウィリアム・カトロス・ウィリアムズ「イカロスの墜落のある風景」はともにピーテル・ブリューゲルの絵画「イカロスの墜落のある風景」に触発された詩で、絵画に描かれた風景を言葉が追いつけるようにして話が進むところが共通している。でも、追いつけて肉薄しつづかなか同一化しきれない隔靴搔痒の感もあって、それが逆に詩の言葉にドラマをもたらず。

今回刊行されたナンシー・キーファーとレベッカ・ブラウ

を目にしてブラウンの文章世界を予期する人はいないだろうが、両者をならべてみると、なるほど、そういうふうに受けたか、という共作ならではの刺激と反応の連鎖が読み取れる。

たとえば冒頭の作品「彼女」。キーファーの描く女性 は、濃い色のうねる髪（かつら？）に、強い視線が特徴的で、オレンジがかかったオーラのようなものが後光のように作品の基調を作っている。これに対し、ブラウンの文章は「もう終わった」と彼女は思ったけれど、終わってはいなかった」と始める。もうこの一行だけで、この連作全体にずしりと振動がおよんでくるようで、たつぷりと含みを感じさせる冒頭部である。

では、いったい何が終わっていなかったのだろうか。その後、その「何」が具体的に示されることはない。それがおそらくこの作品を「小説」と呼ぶことに躊躇する所以だろう。かわりにこの作品では、「終わっていなかった」感そのものを、ぐいぐいつきつける。そういう意味では、むしろ「詩」に近いのだ。

彼女の何が間違っていたのか？ 彼女はこう思いはじめていた——どんな違いが生まれるにせよ、それだけでは十分でないのは、彼女がとにかくそういう人間だからで

あり、これからもそういう人間だからであり、ではどう  
いう人間かといえば、欠陥を有し、要注意視され、墮落  
していて、不浄で、不完全で、倒錯していて、恥——彼  
女の恥。憐れみというものを、彼女は学ばねばなるま  
い。(十頁)

What was wrong with her? She was beginning to think  
that whatever difference it made would not be enough  
for her because that was just the way she was and  
would be which was flawed marked corrupt unclean  
deficient perverse a shame her shame. She'd have to  
learn mercy. (p.2)

ごく短い文章なのに、その「終わらない」感ときたらす  
ごい。いつの間にか生じたくだ感のようなものが段々  
にしつこくなり、かつ加速して、「ではどういいう人間かと  
いえば」というような理由説明から「欠陥を有し、要注意  
視され、墮落していて、不浄で、不完全で、倒錯してい  
て、恥——彼女の恥」というふうに言葉が並べ立てられて  
いく。次々に形容がつづくという意味では多弁のだが、  
実際にはそれは雄弁には至らず、むしろどちらかという  
失語に近いような行き詰まりを感じさせる。しかも言葉は

はほとんど迷走なのだが、もっと別の何かを知っている言  
葉なのである。

本書の最後を締めくくる「いつかある日」の最後の部分  
は、それが感動的なレベルに達している。

背後に気をつけたり、念入りに用心したり、たえず注  
意を怠らずとか、心配するとかもなく、いかなるレベル  
の警戒態勢も強いられないだろう。知られるべきことを  
すべて、わたしたちは知るだろう。ほかのことは知らな  
いだろうし、知る必要もないだろう。不愉快なことは何  
もないだろう。

そうならたらわたしたちはみんな、安らかに去るだろ  
う。ずっと前から、わたしたちは知られ、受け入れ、準  
備をするだろう。

わたしたちは美しくあるだろう。(九五頁)

We will not have to watch our backs, exercise extra  
caution, be vigilant, worry or be on any color slash  
level of alert. We will know all things that need to be  
known. We will not know or have to other things.  
There will not be unpleasant things.

Then we will all leave easily. We will be known from

どんだん続いていくのである。

この部分、是非、原文の方ものぞいてもらうといいと思  
うのだが、"because that was just the way she was and  
would be which was flawed marked corrupt unclean  
deficient perverse a shame her shame"というあたり、ほ  
んどと神経症的で、自家中毒的で、でもどこか言葉のきり  
きり舞いを楽しむような遊び心も感じられ、読んでみると  
言葉の滑走に酔いもする。何だか変だなあ、と思いつつ  
も、説得されてしまう。

英語では、散文でも詩でもこうした同格連鎖で読者を巻  
きこむことが多い。そこが書き手の腕の見せ所ともなる。  
日本語のリズムは英語とはちがいが必ずしもそうした反復性  
中心に生み出されるわけではない。原文と訳文をくらべると、  
訳者の柴田元幸がそのあたりの微妙なバランスをうまくと  
とっているのがよくわかる。「欠陥を有し」から「墮  
落」「不浄」「不完全」「倒錯」、そして「恥」という流れに  
は、反復性を響かせつつも微妙な落着感があつて日本語と  
しての読み心地がよく、なるほど、と思わせるのである。  
「かつらの合っていない女」は随所でこのように言葉が並  
べ立てられている。理詰めで解き明かしたり、わかりやす  
く説明するかわりに、もっと別の、より身体的と言つても  
いいような領域に言葉が迷いこんでいく。理性的な意味で

long before and will accept and be made ready.

We will be beautiful.

(p.46)

たてつづけに繰り返される主語・動詞の We will (「だ  
ろう」) が印象的である。We will は語り手の強い態度であ  
り、決意であり、期待でもある。だから、ここに感じられ  
るのは切羽詰まった神経症的な反復性よりも、緊張をほど  
いてくれるようなやさしい連鎖なのである。どこに行くの  
かわからない不安ではなく、大丈夫、大丈夫、と繰り返し  
背中をなでられているような安心感。最後の一行が何とも  
いい。

エクフラシ的な詩作品に必ずと言っていいほど伴うの  
は、皮肉なことだが、ことばの無力感である。出発点にあ  
るのは、美術作品の寡黙さを補い、十分に言葉になつてい  
ないものを作品にかわって言葉にしてやろうという前のめ  
りさなのに、結局、十分な言葉で語る事ができない。目  
の前の美術作品の無言に負けてしまうのである。しかし、  
その敗北からくるあせりや屈辱は、実は文章の側からみる  
と、最良の果実でもある。こんなに複雑でデリケートな  
「不可能」を表現できるのは、やはり言語ならではだろ  
う。『かつらの合っていない女』にもそんな充実した不可  
能を感じるのである。